

Muse

TEIKOKU DATABANK
HISTORICAL MUSEUM

帝国データバンク史料館だより
[ミューズ]

2019.7
Vol. 35

Muse
Talk

ミューズトーク

北海道・別海で書き続ける農民作家

酪農と文学、人々との出会いの記録

玉井裕志さん

輝業家交差点

近代につぼみを彩る人物往来

大原孫三郎

百年先を見通す慧眼、いまに伝えるこころ
地域に尽くし、社会・文化事業を支えた魁

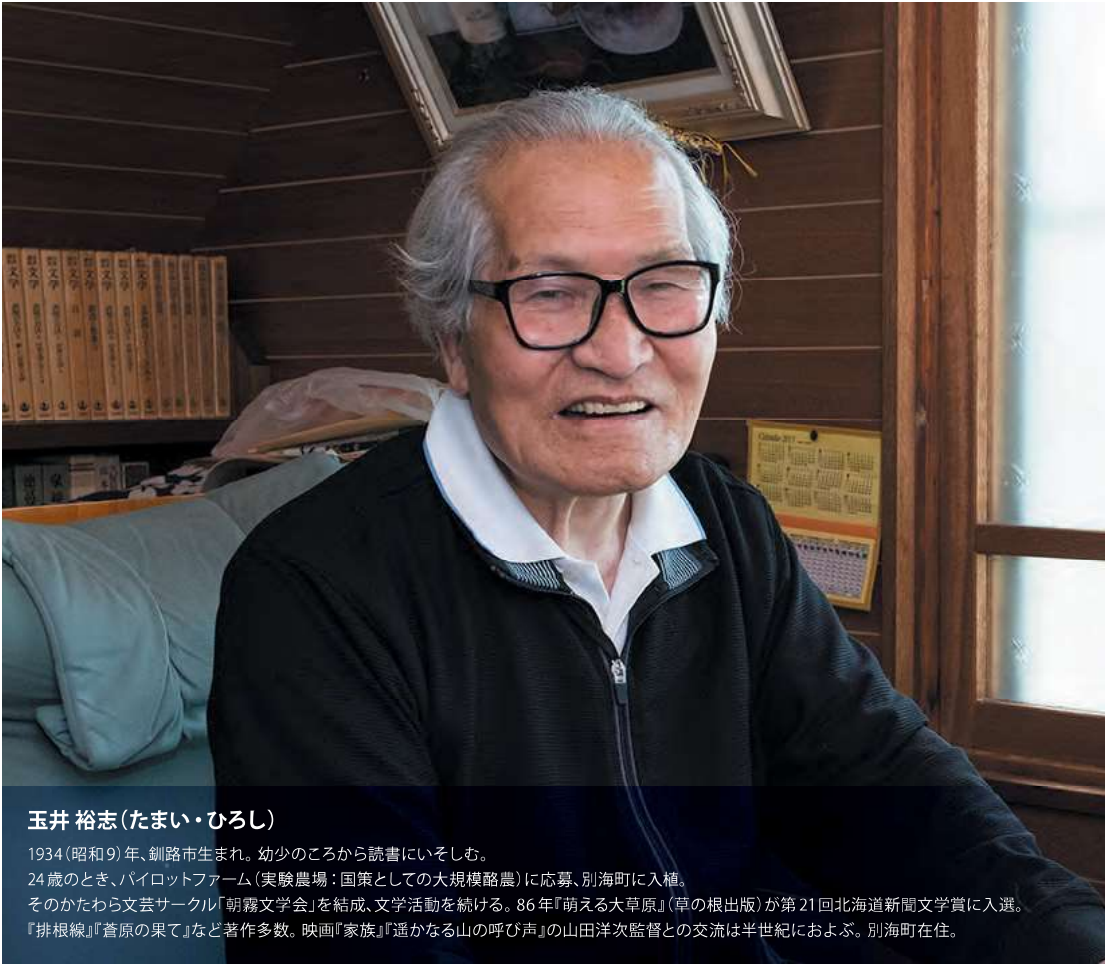
国士舘大学教授 / 大阪大学名誉教授 阿部 武司

《里山の逸品》精油、絨毯、齒舞昆布

北海道・別海で書き続ける農民作家

— 酪農と文学、人々との出会いの記録 —

玉井裕志さん



玉井 裕志(たまい・ひろし)

1934(昭和9)年、釧路市生まれ。幼少のころから読書にいそしむ。
24歳のとき、パイロットファーム(実験農場:国策としての大規模酪農)に応募、別海町に入植。
そのかわら文芸サークル「朝霧文学会」を結成、文学活動が続ける。86年『萌える大草原』(草の根出版)が第21回北海道新聞文学賞に入選。
『排根線』『首原の果て』など著作多数。映画『家族』『遙かなる山の呼び声』の山田洋次監督との交流は半世紀におよぶ。別海町在住。



別海町の玉井裕志文学館。大草原の文学館と呼ばれている

実兄が読み聞かせた
本の世界。
小学校長に借りた
「円本」に魅かれて

1918(大正7)年、両親が徳島県から釧路に来て炭焼きを始めました。子どもは男ばかり6人兄弟でしたが、上2人が太平洋戦争で戦死、僕は残った4人のうちの3番目、五男です。僕と10才、年の離れた3兄が、字の読めない両親に吉川英治や大佛次郎の本を朗読して、聞かせていました。僕は3歳だったけど、母親に抱かれながら夜遅くまで一緒に聞いていたような子どもでした。



小学校5年生の時、赴任間もない校長先生が、本ばかり読んでいる僕に芥川龍之介と佐藤春夫の円本を2冊貸してくれました。円本は漢字に全部ルビが振ってあるので、5年生でも読めたのです。『羅生門』や『地獄変』を、兄貴のように両親に読んで聞かせました。文学に目覚めるとい言葉がありますが、そのころ、本当の文学に目覚めたと思います。

「乳と蜜の流れる」
パイロットファームに。
無策で、過酷な
実験農場の現実。

中学を卒業すると、2年半ほど鉄道員の仕事に就きましたが、仕事がのろいし、気が利かないために勤まらなかつた。それに僕は、少年時代から晴耕雨読の生活に憧れ、農民として生きていきたいかつたので、親と同居し、兄貴の畑を手伝うことにしました。天気の日忙しいけど、雨が降

れば休みだから、そんな時、僕は急いで馬小屋の2階へ駆け上って本を読んでばかりでした。

24歳になった時に根釧原野のパイロットファームを知りました。キャッチコピーは「乳と蜜の流れる里」。58(昭和33)年4月、厳しい審査を経て、別海村への入植が決まり、夢に向けての一步を踏み出します。そのあと大変な目に遭うことも知らずに。



初めて入選した玉井さんの小説が載っている

パイロットファームでは、入植と同時に借金250万円を入植者一人ひとりに背負わせました。助成金などの制度もなく、すべて個人の借金です。住宅費用40万円、牛舎60万円。残り150万円は、泥流地帯の道路を整備するという名目で負担させられました。本来なら国が負担すべき公共工事の経費まで入植者にかかってくる。さらに驚くことに、入植地には何も無い、入植してすぐ牛が飼えるわけではなかったのです。

他方、牛舎に入れる牛はジャージー種と決められていました。とても細い牛で乳を搾っても量が少なく、子牛に飲ませたらそれで終わり。国はそんな牛の乳を搾って「借金を返せ」の一点張り。借金を払うためにもホルスタインを飼育したいと言っても全く相手にされなかった。挙句の果て

「言うことを聞かないんだつたら、銃殺するぞ」と、今では考えられないようなことも言われました。酪農する農家が続出したのは当然でしょう。

そして牛乳の生産調整ということもありました。農協も乳業メーカーも、農民を信用していません。買収する量以上の余剰牛乳を、酪農家が勝手に売らないように係員が食紅を入れて真っ赤にしてしまいます。真っ赤な牛乳は子牛に飲ませるか、川へ流さなきゃならない。政府は本当に勝手ですね。私はとても悔しい思いをしました。

酪農家に休日、余暇はない。深夜の起床、本を読んで小説も書く。

入植当初は水道がなく、毎日が井戸掘り。疲れ果てましたが、書くことだけは続け、書き上げた小説を、佐藤愛子さんやなだいなださんらを輩出した著名な文芸誌『文藝首都』に送ったのです。そうしたらその作品がトップ当選。選者に褒められ、その時に僕は酪農家でも小説を書いていけるかもしれないと思いました。

もともと周囲の人は文学などには関心がない。「玉井は、牛もろくにやらないで、昼間から本を読んだり、小説を書いたりしている」とデマを流す人までいました。開拓者に昼間、本を読む暇などあるわけがない。夜明けから日暮れまでの仕事をしながら、それでも小説を書きたかったら、睡眠時間を削るしかありません。酪農の仕事が終わわり、晩ご飯を食べたらすぐに

床につき、真夜中の2時に起きて小説を書く。牛舎へ行くのが朝の5時半ですから、深夜の3時間半が、本を読んで、書く時間でした。小説を書いているうちに気分が乗ってきて、5時半には牛舎に行かなければならない。相手は生き物ですから中断せざるを得ませんでした。

66年、朝霧文学会を立ち上げました。僕が32歳の時です。酪農家の娘さんで19歳の小野京子さんと高校2年生の畠澤憲二さんと3人で始めました。今年、同会は53年目に、同人誌『朝霧』は第27号を発行しました。

それで小説を書き続けていたら、北海道新聞が毎年発行する『北海道新鋭小説集』に作品が入選したのです。北海道で発行された同人誌を北大教授や文芸評論家が全て読み、その中から5人ほどが選ばれて1冊の本になるのですが、入選するのは大変なことです。この新鋭小説集に僕は4年連続入選したのです。それを知った東京の出版社から依頼されて書いたのが『萌える大草原』。僕の自伝小説みたいなのですが、北海道新聞文学賞の佳作に入選しました。

映画『家族』 『遙かなる山の呼び声』に 山田洋次監督との 出会いが つなぐ記憶。

山田洋次監督は『家族』という映画の制作で、カメラマンとともに、雪の深い冬に初めて根釧原野にロケハンに来られました。監督が偶然訪れた開拓農協で「玉井裕志」という、牛を飼いながら小説を書いている人がいる」と聞いたそうで、ここへ訪ねて来られた。70年のことで、僕が35歳、監督は37歳でした。



多くの芥川賞作家を輩出した同人誌『文藝首都』。玉井さんの作品も取り上げられた

それがきっかけで監督との交流が始まり、映画制作のお手伝いをしたり、逆に僕が苦しい時に励ましていただいたり、とても温かく、嬉しいお付き合いが今も続いています。監督と出会わなかったら、僕は牛飼いを辞めていたかもしれません。

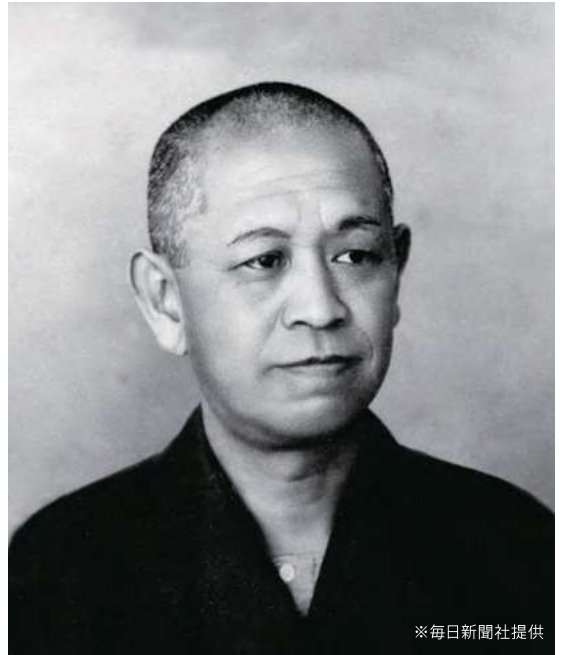
監督は、僕の本の前書きやご自身の著作の中で、「玉井裕志さんは、今は農民ではないんだけど、私はずっと玉井さんを農民作家という名前で呼び続けたいんです」と書いてくれました。酪農をしながら小説を書く、この場所で酪農の作品を書き続ける。さらには酪農家の現実を伝えていく。これは僕にしかできないことなのだと思いつつ、これからも書き続けていくつもりです。



山田洋次監督との付き合いは半世紀におよぶ

輝業家交差点

近代にっぽんを彩る人物往来

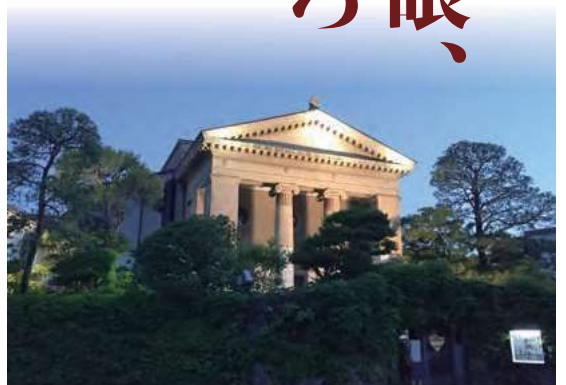


※毎日新聞社提供

大原孫三郎

百年先を見通す慧眼、
いまに伝えるこころ
地域に尽くし、
社会・文化事業を支えた魁

国土舘大学教授／大阪大学名誉教授



阿部武司

倉敷「大原美術館」創設者の素顔

岡山県倉敷を訪れる人は、その美しい街並みとともに、フランス印象派の絵画をはじめ内外の美術品を多数展示している大原美術館に感銘を受けるに違いない。しかし、創作者大原孫三郎のその他の業績は必ずしも知られていない。

孫三郎は、徳川期に商家として発展し、幕末からは大地主になった大原家に1880(明治13)年に生まれた。16歳で上京し、東京専門学校(現早稲田大学)に入学したが、放蕩に身を持ち崩して巨額の借金を作り、義兄に倉敷に連れ戻された。その直後に、義兄が急死して孫三郎は過去を大いに反省し、二宮尊徳の思想やキリスト教によって立ち直った。さらに、岡山孤児院を運営していた石井十次と出会い、敬虔なキリスト教徒となった。孫三郎は、1901年に父が経営していた倉敷紡績株式会社に入社するとまもなく労働者の教育そして福利厚生の上上に情熱を注ぐようになり、1906年、事業から引退した父の後を継いで同社社長および倉敷銀行(現中国銀行の前身)頭取に就任した。その後孫三郎は、倉紡(クラボウ)と倉敷絹織(1926年

創立。現クラレ)を全国的大企業に育て、中国地方の方々はなじみの深い三つの企業、中国銀行・中国電力・山陽新聞社の基礎を築いた卓越した経営者となった。

時流に乗らず、卓抜した経営手腕

彼の経営者としての力量を示す一例を挙げておこう。第一次世界大戦(1914~18年)により日本は大変な好況を経験したが、そのころ孫三郎は大量の紡績機械を外国に発注し、岡山県のほか香川県や愛媛県に至るまで瀬戸内海を取り巻くように綿紡績工場を増やしていった。当時、日本の鉄道網が大体完成し、建設が遅れていた四国にも現J・R予讃線などが整備され、内航海運も整っていった。瀬戸内海沿岸から大阪湾周辺には備後・児島・播州・泉州・泉北・和歌山などの綿織物産地(機屋が集積している地域)が多数存在していた。倉紡は、それらの産地に鉄道網や瀬戸内海の内航海運を活用して大量の綿糸を供給するようになった。当時、全国の綿紡績企業は綿糸以外に綿布の製造に力を注ぎ、大戦後には中国に紡績工場(在華紡と呼ばれ

た)も積極的に建設していたが、孫三郎はそうした潮流には乗らず、独自の道を進んだのである。

孫三郎は、1919(大正8)年に倉敷銀行を母体にして岡山県の六銀行を合併した第一合同銀行(現中国銀行の一体)を新設し、その後も県下中小銀行の吸収合併を続けた。1909年に孫三郎が中心となって設立した倉敷電燈も大戦中・後に県下の電力企業の合併を推進していたが、彼はそれらの銀行や電力企業も倉紡と織物産地とのネットワークを支える存在と位置付けていたのかもしれない。大戦後には1920(大正9)年から31(昭和6)年まで不況が続く、孫三郎は大変苦勞するが、景気回復後に倉紡は目覚ましい回復を遂げる。その一因はすでに築きあげていた瀬戸内海周辺の紡績工場群より、伝統的な和装用小幅木綿から輸出向け広幅綿布あるいは内需向けの新製品へと転換を進めていた織物産地に、大量の綿糸を販売できるようになったためであった。大戦期に孫三郎が進めた工場群の建設は、地方の産業発展を広い視点からとらえた、すぐれた構想だったといえよう。地方経済の衰退が問題とされている今日、こうしたスケールの大きな地域振興策が求められているのではなからうか。

社会事業を实践、芸術の庇護

孫三郎が他の企業家と大きく異なるのは、こうした企業経営以外に多様な社会貢献事業を实践した点である。彼はまず、芸術の庇護者であった。孫三郎は、岡山県の出身者を中心に前途有望な若者たちに奨学金や留学の費用を気前よく出したが、その一人に岡山県出身の洋画家児島虎次郎がいた。児島の画才と人柄にほれ込んだ孫三郎は、東京美術学校(現東京芸術大学)の学費だけでなく卒業後のベルギーへの留学費用も払い、さらに彼をその後数回ヨーロッパに派遣して、印象派を中心とするヨーロッパの絵画や古代のエジプトや中国の美術品を購入させた。孫三郎は、1929年に死去した児島を悼み30年秋に大原美術館を設立した。哲学者の柳宗悦が推進していた民芸運動も同じころから支援するようになり、36年には孫三郎の出資により東京に日本民藝館が設立された。

大原の社会貢献活動としてもう一つ注目されるのが農業、社会問題および労働科学に関するユニークな三つの研究所の設立である。大原農業研究所・農研。現岡山大学資源植物科学研究所)は、1914年に農業学校として設立した財団法人大原奨農会を、主任研究員の近藤萬太郎の進言に基づき24年に農学の研究機関に改組した上で、29年に研究所と改称した。大原社会問題研究所・社研。現法政大学大原社会問題研究所)は、1919年に大阪市内に設立され、元東大教授の高野岩三郎所長の下で森戸辰男、櫛田民蔵などの労農派マルクス主義者をはじめ第一級の社会学者を結集した組織であった。この研究所を孫三郎が設置したのは、14年に亡くなった恩人石井十次の孤児救済事業を振り返り、たんなる慈善事業では貧困問題は解決できないのであって、救済から防貧へと発想を転換しなければならないとする問題意識からであった。最後の倉敷労働科学研究所(労研。現大原記念労働科学研究所)は、社研の研究員であった医学博士の暉峻義等(暉峻義等)が1920年冬の深夜に倉敷の万寿工場に連れてゆき、深夜業を担当する女子労働者や幼年工の悲惨な労働の実態を見せてその改善を訴え、感動した暉峻が同意したことがきっかけとなり、万寿工場内

に翌21年に設置された。労働科学は、人間の労働を医学・生理学・心理学などを駆使して科学的に考察する、欧米で展開しつつあった新しい学問であったが、日本ではこの労研で暉峻らが形成していったのである。

社研と労研には防貧を進め、過酷な労働条件を改善したという孫三郎の願いが込められていたが、農研の源流である大原奨農会をインフォーマルな組織として1910年に作ったところに彼がめざしていたのは小作人の地位向上であった。彼は、日本のオーウェン(エンゲルスが空想的社会主義者と位置付けたイギリス産業革命期の開明的な紡績工場主)としばしば評されるように、倉紡入社以来、一貫して寄宿舎や社宅の工夫をはじめ労働者の福利厚生の上向上に努めた。そうした人道主義が、三つの研究所の設立にも深く関わっていたのである。三研究所は、信頼する近藤、高野、暉峻の3人に一任され、孫三郎は一切口を挟まなかったが、それらを可能な限り支援し続けた。三つの機関では孫三郎の願い通りに研究が進められた訳ではなかったが、いずれも日本では前例がなかった施設であった。全てが創立からほぼ一世紀後の今日まで存続しており、学術研究上果たしてきた役割は大きい。

慈善活動よりも「防貧」「労働理想主義」へ

孫三郎は、1927年の金融恐慌から30年代初頭の昭和恐慌期まで、経営していた企業の業績が振るわず、姉・児島虎次郎・妻と愛する人々を次々に失い、36年以降には狭心症に悩まされ、太平洋戦争中の43年に満62歳で世を去った。長いとは言えないその生涯のなかで彼は、今日まで続く多数の個性的な企業、大原美術館、三つの研究所、そして詳しく述べる余裕はないが、倉敷中央病院や倉敷の美しい街並みも、後世の人々に残してくれた。

1919年には、第一次世界大戦の戦後処理を定めたヴェルサイユ講和条約が六月にパリで調印され、それにより設立されたILO(国際労働機関)の第1回総会が秋にアメリカ合衆国のワシントンDCで開催された。今から一世

紀前に開かれたこの会議には政府、資本金家、労働者の各代表が派遣されたが、著名な経済学者の福田徳三、東京高等商業学校(現一橋大学)教授は、資本金家代表として鐘淵紡績専務取締役の武藤山治が孫三郎が適任と論じた。

結局、武藤がその大役を引き受けたが、彼が、20世紀初頭の鐘紡で、寄宿舎の改善や共済組合の設立に努めていた事実はよく知られている。これらの福利厚生政策が孫三郎の試みとよく似ているため、両者はしばしば同一視されるが、私はそうした見解には違和感を覚える。武藤は、当時世界の綿製品市場を制覇していたイギリスのランカシャー綿業に打ち勝つ強靱な力を鐘紡に付けることが肝要と考え、その実現にあたって労働者が金銭的動機だけでなく、自尊心を満たし仕事を通じて自己実現する存在であると気付き、彼らの内面から盛り上がる勤労意欲を引き出すことをめざすようになった。冷徹な経営者であった彼は、労働者への同情だけから鐘紡の福利厚生を充実させていったわけではなかった。それゆえ武藤はワシントンでは、日本の紡績企業が直ちに深夜業を廃止できないこと、しかし、そのほかの労働条件に関して鐘紡では改善が大いに進んでおり、労使協調が定着していることを、自信をもって論じたのであった。

他方、当時の孫三郎は、単なる慈善事業には批判的で、防貧を理想とし、また労働者の過酷な労働条件の改善を心から願っていた。そして慈善的家父長制的な「経営家族主義」にとどまった武藤に比べて、一回り年下で大正デモクラシーの洗礼を受けていた孫三郎は、労使を対等とみる「労働理想主義」を主張した。ILO第1回総会では、女性と幼年工の深夜業禁止のほか一日8時間・週48時間労働制の採用も大きな議題であったが、日本政府はこれを今に至るまで批准していない。歴史学でイフ(もしも)は禁句であるが、孫三郎がこの会議で資本金家代表に選ばれたとしたら、そうした議題にどのように対応したのだろうかと私はつい考えしてしまう。小説『わしの眼は十年先が見える』は孫三郎を主人公とした城山三郎の名作であるが、孫三郎は百年先まで見通していたのかもしれない。

山 の 逸品

山が多く森林に恵まれ、
周囲を海に囲まれるこの国で
自然、ひと、環境という
地域の資産を活かしながら
時代を超えたものづくりが息づく。



椿油 東京諸島

大島や利島を含む11の島を、東京諸島という。
その距離、都心から大島まで120 km、
利島まではさらに20 km。
古くから椿が自生し、実から採れる油は、
かつて食用をはじめ灯用や薬用に使われた。
江戸時代には毛髪用に使われ、
今もヘアケア製品には欠かせない。
そんな椿油が、近年の健康志向や
オイルブームで再び脚光を浴びている。

写真提供 / 有限会社高田製油所

絨毯 山形県山辺町

艶やかで美しいグラデーションと
柄が浮かび上がるような立体感、
厚みのあるしっかりした踏み心地。
天候に左右される農業だけでなく、
安定して働ける場所をつくろうと
山辺町で一から始まった絨毯づくりは、
今や多くの世界の要人を
足元からもてなしている。

写真提供 / オリエンタルカーペット株式会社

歯舞昆布 北海道根室市

2013年、
ユネスコの世界無形文化遺産に登録された和食。
うま味成分を豊富に含む昆布は、
日本の食文化の原点でもある。
本土最東端にある納沙布岬沖、
瑤瑤瑠（ようまゐ）水道特有の
速い潮の流れに負けずに育った
北方領土貝殻島の掉前昆布は
もっちりとした食感で美味しく、
日本一柔らかいと言われる。

写真協力 / 根室市北方領土資料館

写真提供/東京島しょ農業協同組合 利島店



大島の椿油

利島と大島、2島で作られる椿油を洋服に例えると、前者はブレタポルテ、後者はオートクチュール、それぞれの個性が際立っている。

「周囲が約8kmの小さな利島は、平地が少なく川もないので米作りができませんでした。そのため江戸時代には年貢代わりに椿油を納めていたのです」と話すのは東京島しょ農業協同組合利島店の柴田敦史さんだ。

利島を代表する椿油の生産は現在、日本一を誇る。円錐形の島を覆うように20



利島の椿油
(写真提供/東京島しょ農業協同組合 利島店)

独自のスタイルを貫く、東京諸島の椿油

万本の椿が植えられ、40軒の椿農家が育てている。そのため原料のトレーサビリティが担保されていることや、有機JAS規格に適合した条件で栽培していることが利島の椿油の特徴である。「かつては搾油をする農家さんもあったようですが、今ではJASが全量買い取り、村営の製油センターで搾油・精製して出荷します。化学的データを充実させ高品質で使いやすい椿油を目指しています」(柴田さん)。生協等への小売の他、油脂会社等に出荷された化粧品原材料として使われる。

他方、伊豆諸島最大の大島も、椿油の生産は島の重要な産業である。利島とは違い、島内には複数の企業がある。その中でただ一社、昔ながらの製法を受け継いでいるのが、有限会社高田製油所である。ガラス張りの工房に入ると、蒸し上げた実の甘く香ばしい香りが漂い、4代目となる高田義土社長が、80年前から使われる玉締め式圧搾機を使って搾油をしていた。そこにお客さんが空になったボトルを持って訪れ、椿油を買っていく。「うち

DATA

利島は東京都で最も小さな村である。島の所管は明治維新後、葦山県、足柄県、静岡県を経て1885(明治18年)に東京都に。漁業も盛んで伊勢海老やサザエは利島を代表する海産物である。

大島は古来より「御神火様」と呼ばれ島民から崇められる三原山をはじめ、自然遺産を多く擁し、伊豆大島ジオパークに認定されるなど観光資源が豊富で人気も高い。

ではよくある光景です」(高田社長)。

玉締め式による椿油作りは、手間はかかるが純粋で上質な椿油を作ることができる。高田社長によれば「極力自然に作っています。肌につけた時になじみの良さや濃厚感はこの搾り方でしか作れないですね。大きな工場で精製した油はさらっとしていますが、うちのは芳醇です。お客さんに『高田さんの椿油は濃く感じる』と言われるとよし!と思います。だから玉締め式のやり方は絶対に譲れません」。

利島と大島では製品作りへのアプローチが違いますが、島の産業を歴史的に支えてきた椿油の伝統を守りながら、ともに将来を拓こうと奮闘を続ける。



日本へ、世界へ。山形の絨毯

工場に入ると明るさと天井の高さに驚く。「気持ちよく働けるようにと、創業社長がこだわった設計になっています」とオリエンタルカーペット株式会社の国井浩嘉さんが説明してくれた。中ではいくつものチームに分かれて絨毯をつくっている。一結び一結び手で織り上げているのは熟練の職人による手織り絨毯、その奥で軽快な音を響かせながら織っているのは、県の文化施設に納入される絨帳だ。ここ、山形県山辺町は「山辺木綿」で知られ、創業者である渡辺順之助氏も綿織物業を営んでいた。創業のきっかけは

1933(昭和8)年に東北地方を襲った大寒波による凶作で、山辺町も大不況に陥り、子女が身売りされるほど事態は深刻だった。これを見かねた順之助氏が、女性がこの地を離れずに収入を得られる職場を興そうと英断し、翌年に中国から技術者を招聘して絨毯づくりを始めた。

戦争で中断していた事業は戦後に再開したものの国内需要は少なく、海外に活路を求めて48年には対米輸出を始める。品質への研鑽も重ね、50年には「マーセライス加工」という、経年で出てくる艶や風



青淵文庫 撮影協力/茨城史料館

合いを新品で表現する技術を開発し、優良品造出の基盤を確立。卓越した技術力が国際的にも認められ、バチカン宮殿に納品するまでになった。全工程の社内一貫生産体制と併せて製品としての確固たる地位を築き、これまで皇居新宮殿をはじめ歌舞伎座、国指定重要文化財でもある茨城史料館の青淵文庫、JR東日本のクルーズトレイン四季島など多くの場所に提供されている。現社長の渡辺博明氏は「当社が多くの国の著名な建造物に納められたのは、マーセライス処理技術を持っていたと言っの大きい」と言い切る。

とはいえ、優れた技術による良い製品というだけでは世界市場を戦っていけない

という。「ものづくりの背景にあるストーリーに基づいたブランディング」という考え方を製品開発に導入しました」といい、建築家やデザイナーとタッグを組み、個人向けの絨毯のブランドを立ち上げた。そのものづくりを支えているのは「山形の非常に辛抱強く、一生懸命頑張る女性たちです」(渡辺社長)と技術を支え続けてきた女性たちの力を讃える。



DATA

山形県山辺町は県南東部に位置し、東部が山形盆地の一部を占める、人口約1万4000人の町である。ニッポン生産が盛んなのはよく知られているが、実は県内でも特に質の高いさくらんぼ産地でもある。

納沙布岬から3.7km先に位置する貝殻島。日本が建設した灯台が見える

北海道最東端、海の荒波で育つ歯舞昆布

昆布漁は北海道の基幹漁業として位置づけられ、国内生産の約95%を占めている。主な産地として5つあり、歯舞漁業協同組合の照井謙吾さんから「昆布とひと口に言っても、各地域で種類や特徴が異なります。歯舞で水揚げされるのは主に長昆布と厚葉昆布という種類で、おでんの具材やおやつ昆布は、この昆布だと思いません」と説明された。だしに使われる羅臼昆布や利尻昆布も、産地の名前を冠しているのではなく、昆布の種類が違っているのである。

歯舞漁協は、道内でいち早く昆布加工製品の開発に取り組んだことでも知られる。「地元漁師たちが醤油に昆布を入れて使っていたことに着目し、はばまい昆布しようゆを発売。昆布醤油という新しさや味の良さで評判になり、大ヒット商品になりました」(同・三浦克典さん)。さらに市場のせり見学、漁家の協力を得て漁民泊など幅広い事業を手掛けるなど、

進取的な漁協という印象を受けた。

昆布は漁家一貫加工で、採取から荷造りまですべて生産者が行う。かつては昆布を船から浜に運ぶのに馬が使われていた。馬は家々で飼育されており、世話は子どもたちの仕事だった。今も昆布の結束単位は、荷馬輸送した頃の名残で「駄」が使われている。

歯舞では6月1日に北方領土である貝殻島での昆布漁が解禁となる。1961(昭和36)年、貝殻島周辺にて昆布漁船13隻が拿捕された。これを聞いた日中総合貿易(LT貿易)の高碓達之助氏は、漁民の窮状を広く内外に訴え、安全操業の枠組みをつくったという。「納沙布岬に建つ高碓達之助先生の顕彰碑には毎年、昆布漁解禁前に花を手向け、



式典を行っています(照井さん)。今も貝殻島昆布漁業交渉は、民間交渉で行われている。

6月いっぱい行いう貝殻島での昆布漁は棹前と呼ばれる。これは、成熟した昆布を採ることを棹入れと呼ぶのに対し、まだ成熟する前、つまり棹を入れる前という意味だ。触らせてもらうと、これで乾燥してあるのかと驚くほどの柔らかさ。ふだん見慣れているだし用の昆布とはまるで違った。わずか1か月あまりの漁で採れる昆布が、貝殻島の棹前昆布という、歯舞を象徴する製品になっている。



写真提供/歯舞漁業協同組合



DATA

北海道の東端にある根室市は「朝日にいちばん近い街」と知られる。ラムサール条約に登録された風運湖・春国位は国内最大の白鳥の飛来地であり、野鳥の聖地として名高い。アメリカの飛行家、リンドバーグが水上飛行機で着陸したのは根室港である。

Road to muse+

帝国データバンクの「舟を編む」 『会社年鑑』歴史を蓄積する100版へ

19世紀末、欧米から日本に移入された信用調査業(興信業)は、
大手機関を中心に企業調査と併せ、
興信録(信用録、要録、会社年鑑)の発行を生業としてきた。
情報の少なかった当時、
調査の過程で得られた企業や人の情報が記された大冊の記録は、
健全な商取引を支える判断材料として大きな機能をもっていた。

帝国データバンクの前身、帝国興信所も創業からしばらく経った
1908(明治41)年に『帝国信用録』を、12(大正元)年には『帝国銀行
会社要録』、現在の『帝国データバンク会社年鑑』をそれぞれ創刊し、
いずれも長期間継続して、出版活動の大きな柱としてきた。信用録
は太平洋戦争の統制下で廃刊に追い込まれ、会社年鑑は発行を中断
する困難な時期もあったが、本年10月ついに100版(2020年版)を
積み重ねることとなった。

SNSが隔々まで普及している現在、分厚く4分冊に編まれた大型書籍は、かつてとは異なる位置を占めているが、これまでの蓄積は、世紀を超え、時代という荒海を航海し、時代の変遷を刻んだ歴史的価値を有していることは紛れもない事実である。

信用録、要録、会社年鑑など、これらの原型はアメリカに求められる。ブラッドストリート社が1850年代後半に発刊した『Bradstreet's Book of Commercial Reports』で、信用調査報告書をまとめて1冊の本にしたものが最初である。こうした海外の例にならって、先発の調査機関である商業興信所、東京興信所、そして帝国興信所が類似書を発行することになった。

麻島昭一「戦前期興信録とその会社広告」『専修大学経営研究所報』第134号(1999年8月、4~10頁)の興信録研究をもとに、その全体像を概観する。

個人の資産・信用を調査したものの代表が、発行順に商業興信所『商工資産信用録』(1894年)、東京興信所『商工信用録』(1899年)、そして『帝国信用録』(1908年)である。各調査機関が商工業者の資産・信用を調べた膨大な情報を大冊にまとめたもので、非公開が原則だったが、特に会員の求めに応じて貸与する方式であった。

他方、企業の信用を調査したものの代表的なのが、商業興信所『日



本全国諸会社役員録』(1892年)、東京興信所『銀行会社要録』(1897年)、そして『帝国銀行会社要録』(1912年)である。商業興信所と東京興信所は日本銀行の支援を受けた相互に連携する機関だったために、『日本全国諸会社役員録』は西日本の企業、後者の『銀行会社要録』は東日本の企業を対象に収録していたが、『帝国銀行会社要録』は全国の企業を対象としていた。それぞれ企業内容の提供だけでなく、役員録を加えている点でも共通していたが、記載内容において若干の違いをみせている。

帝国興信所は先発2大興信所に遅れて、その模倣の下に『信用録』『要録』を発行したわけで、結果的に類似した刊行物となった。ただ同社の興信録(要録)は、先発2社よりも対象が広範囲であり、そのほかに掲載社数、内容も分厚くなっており、少なくとも量的には先発興信所を凌いでいた。



110年前の絵はがきから見えてきたこと

品川御殿山、1年早かった創業10年祭

1枚の絵はがきがある。褪色が激しく赤1色刷りの写真は不鮮明で、写っている人々の表情を窺うことはできない。しかし、公園のような広場に正装したと思しき大勢の人々が集まり、和やかな雰囲気にも包まれている印象だ。

日露戦争が絵はがきブームの火付け役

絵はがき裏面下部に「<十周年記念>念紀園遊會々場」と刷り込まれた文字が見える。宛名面にも「十周年・・・」らしき文字が見えるが、これは裏写り。紙質はあまり良くない。帝国データバンクの前身、帝国興信所が創業10周年を記念して発行した絵はがきである。

「日本に私製の絵はがきが登場するのは、1900(明治33)年頃のこと、私製はがきの使用が認可されたことで絵はがきの作成が可能になったためです。02年に官製の絵はがきが発売されました。そして05年には日露戦争の状況を伝える絵はがきが発売され、06年には日露戦争の戦勝記念絵はがきが作られたことで大きなブームになったといわれています」(本間与之郵政博物館学芸員)。

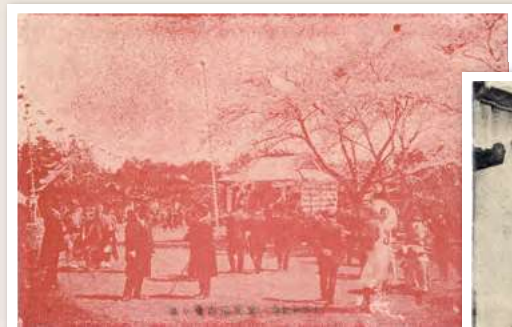
帝国興信所もブームにあやかって、絵はがきを制作したものと思われる。創業時の困難を経て、何とか事業を軌道にのせた創業者、後藤武夫は、07年10月に社員数が47名に達し、ことのほか喜んだ。赤穂四十七義士の熱狂的な崇拜者でもあった武夫は、この数の一致にあやかり新橋の一流料亭「花月」を貸し切って記念の宴会を行ったほどであった。

富豪、日比谷平左衛門別荘を借り切って大園遊会

翌々年の09(明治42)年4月14日、実際には1年早いにもかかわらず、創業10周年の記念園遊会を開催した。その会場が、紡績業で一代の財を成した富豪、日比谷平左衛門の品川御殿山の別荘で、絵はがきの写真である。

当日は市川団十郎が着用したという大星由良之助の衣装を借り受けた武夫を先頭に、四十七士に扮した社員たちが本社のあった木挽町から泉岳寺下まで船で乗り付け、参拝の後、楽隊を先頭に、御殿山の会場へ繰り込むという趣向だった。式典には大浦兼武農商務大臣らの祝辞朗読の後、伊井蓉峰、河合武雄らの舞台、浪花節、新内節、手品などが演じられた。

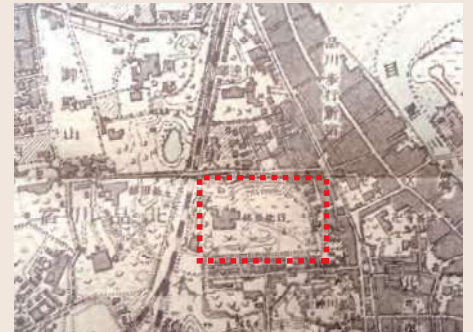
記録によれば5,000余名の加盟会員に招待状を送ったという。かなり誇張された人数だが、品川歴史館に残っている当時の地図を見れば、日比谷邸の広大さが窺われる。現在は京急電鉄北品川駅から第一京浜国道を渡り、品川女子学院を通り過ぎた辺り、品川御殿山の南側、御殿山通り沿いのマンションが群立する一帯である。すでに面影は全く残っておらず、隣接している権現山公園や品川神社に当時のわずかな痕跡を見ることができる。



1909(明治42)年、帝国興信所が実際よりも1年早く開いた創業10周年記念園遊会の絵はがき。会場として借り切った富豪、日比谷平左衛門の品川御殿山の別荘写真が使われている。宛名面上部には清音で「郵便はがき」と刷り込まれているが、「郵便はがき」と濁音が使用されるのは、1933(昭和8)年以降である。



創業10周年を記念して作られた絵はがきは3枚組。これはそのうちの1枚。当時、中央区木挽町にあった本社。赤穂義士に扮した社員は、船で泉岳寺下まで乗り付け、それから品川御殿山まで行進した。



品川御殿山、日比谷平左衛門邸付近の実測図。(1910年3月、大日本帝国陸地測量部、品川歴史館所蔵)

高千穂大、立教大ゼミと望遠鏡工業会が合同シンポ 特別企画「地場産業」展をきっかけに

高千穂大学・大島久幸ゼミと立教大学・岡部桂史ゼミは、一般社団法人日本望遠鏡工業会(会長:木村真琴ニコン相談役)と合同で、2019年7月4日、東京の地場産業「双眼鏡」に関するシンポジウムを立教大学で開催した。当日は両大学のゼミ生約40人と同工業会の会員企業約50社が参加。大島久幸教授の「戦後双眼鏡の歩み」の研究に関する講演に続き、メーカー側と地場産業を研究する学生との間で熱っぽい質疑応答、情報交換が行われ、珍しい産学連携となった。

今回の催しは、帝国データバンク史料館が2018年に実施した特別企画「地場“讚”業一伝統と革新の軌跡」展で、高千穂大・大島ゼミ学生が「双眼鏡」を取り上げ、望遠鏡工業会に加盟している企業を現地取材したことがきっかけだった。統計データや文献資料だけでは分からない生産現場でのリアルなヒヤリングは、社会人との交流機会のない学生と日ごろ若者との接触の少ない生産者との出会いと共感の場となり、今回の成果につながった。

帝国データバンク史料館 PICKUP





〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町14-3 TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

ご利用案内

- [入館料] 無料
[開館時間] 10:00～16:30 (入館は16:00まで)
[休館日] 土・日・月曜日および祝日、年末年始
(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

交通のご案内

- [JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅 徒歩8分
中央線 四ツ谷駅 四ツ谷口から徒歩9分
[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分
都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分
丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し付けください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介しています。

www.tdb-muse.jp